

## 中島敦論 文字・歴史・歴史記述

——「李陵」、「文字禍」を中心として——

中 島 甲 臣

某月某日、「敦に就いての」講演とそれに続いて講演者を含む数人のシンポジウムがあった。後者で、「文字禍」に関連して、文字、歴史、歴史叙述も話題となった。論者の一部は「特定の哲学」を背景にしているかに見えた。

それらの論旨に同感するかどうかは別として、甚だ「刺激的」な講演&シンポジウムであった。

この講演&シンポジウムの論旨はそれとし、専ら「李陵」と「文字禍」の記述に準拠し、敦の歴史や歴史の記述に関する考えを、改めて自分なりに確認して見ようとするのが本稿である。

ただ、行論の都合で、筆が「作品論」に亘かも知れないが、それは了とされたい。

目的は、敦の文字、歴史、歴史叙述に関する考えの解明で、文字、歴史、歴史叙述の一般論ではないからであ

る。

## 李陵の司馬遷

### 敦の描く司馬遷の歴史記述

「李陵」の中の歴史や歴史の記述に関する事項は、当然ながらその中の司馬遷に関する事項の中にある。

その関係部分を抄録し、考察の対象とする。抄録はAとFの六個所である。「李陵」の中で、歴史や歴史の記述に関する司馬遷の考えを示す部分は意外と少ない。

同じく「李陵」の中の司馬遷に関する事項でも、上記観点以外の事項、例えば司馬遷と李陵との関係、宮刑、その他は省略する。

A 司馬氏は元周の史官であった。……漢の代となつてから四代目の司馬談が武帝に仕えて……大史令をつとめた。この談が遷の父である。……古今を一貫せる通史の編述こそは彼の一生の念願だったのだが、単に材料の蒐集のみで終わつて了つたのである。……父が死んでから二年の後、果たして、司馬遷は大史令の職を継いだ。父の蒐集した資料と官廷所蔵の秘冊とを用いて……彼は史記の編纂に着手した。遷、時に年四十二。

以上は主として『史記』の「太子公自序」によっている。（佐々木充・中島敦の文学・三三九頁）。上記の部分は、直接的には「歴史や歴史の記述に関する態度」に関わっていないが、司馬遷の「覚悟」は広い意味でやはり上記の事項に属する。

B 腹案はとうに出来上っていた。その腹案による史書の形式は従来の史書のどれにも似ていなかった。彼は道徳的批判の規準を示すものとしては春秋を推したが、事実を伝える史書としては何としてもあきたらなかった。もっと事実が欲しい。教訓よりも事実が。左伝や国語になると、成程事実はある。左伝の叙事の巧妙さに至っては感嘆の外はない。しかし、その事実を作り上げる一人一人の人間についての探求が無い。事件の中に於ける……彼等一人一人の身許調べの欠けているのが、司馬遷には不服だった。それに従来の史書は凡て、当代の者に既往をしらしめる事が主眼となっていて、未来の者に当代を知らしめるためのものとしての用意が余りに欠けすぎているようである。

C<sup>⑦</sup> 彼「司馬遷」も孔子に倣って、述べて作らぬ方針を執ったが、しかし、孔子のそれとは多分に内容を異にした述<sup>のべてつくらず</sup>而不作である。司馬遷にとって、単なる編年体の事件列挙は未だ「述べる」の中にはいらぬものだったし、又、後世人の事実そのものを知ることが妨げる様な、余りにも道徳的な断案は、寧ろ「作る」の部類に入るように思われた。

ここで漸く史書記述の態度として「述而不作<sup>のべてつくらず</sup>」が登場する。上記B、Cに現れて居る限りにおいて、春秋、左伝、国語が、その見地から、どの様に判定されているかを一応表示してみる。

註(ア) Cは実際の「李陵」ではDのあとに出ているが、此処では行論の都合上、順序を逆にしてある。

述べる またはその否定の 述べぬ に関連して

作らぬ またはその否定の 作る に関連して

ア 春秋は事実を伝える史書としては何としてもあきたりない。もっと事実が欲しい。教訓よりも事実が。

ア\* 彼は道徳的批判の規準を示すものとしては春秋を推した。

イ 左伝や国語になると、成程事実はある。左伝の叙事の巧妙さに至っては感嘆の外はない。

イ\* 「左伝や国語では」その事実を作り上げる一人一人の人間についての探求が無い。事件の中に於ける彼等一人一人の身許調べがかけている。

ウ 単なる編年体の事件列挙は未だ「述べる」の中にはいない。

ウ\* 後世人の事実そのものを知ることが妨げる様な、余りに道徳的な断案は、寧ろ「作る」の部類に入る。

「孔子のそれとは多分に内容を異にした述而不作<sup>のべてつくらず</sup>である」と司馬遷(敦?)は宣言しているが、それらに就いては

「あきたりない（ア）」 「述べるの中にはいらぬ（ウ）」 「作るの部類に入る（ウ）」  
など、否定的言辭が多く、また「一人一人の身許調べ」が「作る」になるのかならぬのか、アとウは矛盾しないのか、の疑問も残る。

春秋に就いてはアとア、左伝、国語に就いてはイとイの様に、上記Bによる限り、評価が動揺しているように見える。何れにせよ、「述べる」とは何か、「作らぬ」とは何か、に関しては、此処では何も積極的には述べられておらず、それらの意味は必ずしも明晰ではない。BとCから推定出来ることは、せいぜい、宮崎市定が「史記を語る」で述べている様に、「司馬遷は優れた歴史家ではあるが、……人物に就いては事業より迭話を好む癖があった」と云うことが垣間みられる程度である。

また「従来の史書は凡て、当代のものに既往をしらしめる事が主眼となっていて、未来の者に当代を知らしめるためのものとしての用意が余り欠けすぎているようである。」も難解な文である。

両者に本質的にどの様な差があるのか。この両者の違いとして唯一司馬遷が言及しているらしいのは「事件の中に於ける彼等一人一人の身許調べがかけている」であるが、これは何も「未来の者に当代を知らしめる」為のみ必要なことではなく、「当代のものに既往をしらしめる」ためにも当然必要なことであり、両者の違いにはならない。

司馬遷は「太子公自序」の終末部で、「未来」について

悲境に陥った後の孔子の著作「春秋」、同じく屈原の「離騷」、左丘の「国語」、孫子の兵法、呂不韋の「呂覽」、韓非の「説難・孤憤」等に言及した後、

「おおかたは聖人賢者の憤懣を発して作られたところのものであった。……」。ゆえにわたしは過去の事を述べつつ未来の事を予想する。

と言及している。

これは宮刑に処せられた司馬遷が現世に絶望し、それぞれ異なった形ではあるが、同じく悲境に立った先人達の著述を偲び、希望を未来に託した自己の心境を語ったもので、その意味では後述のFの範疇に属する。史書の方法論を語るBとは異質である。

もし敦が、Bで、「国語」に言及したことより、「太子公自序」の上記の部分进行し（「太子公自序」のなかには「国語」はこの一個所にしか出ていない）この「過去と未来」をとりあげたとすれば、心情の表明の文に方法論としての役目を与えた事になる。その「説明」が不得要領となるのは当然である。

それは扱て措き、司馬遷の書こうとしていた史書は、どの様なものであったか。

D 要するに、司馬遷の欲するものは、在来の史には求めて得られなかった。どういふ点で在来の史書があきたらぬかは、彼自身でも自ら欲する所を書き上げて見て始めて判然とする底のものと思われた。彼の胸中に

あるモヤモヤと鬱積したものを書現すことの要求の方が、在来（しやうらい）の史書に対する批判より先に立った。……自ら新しいものを創るという形でしか現れないのである。自分が長い間頭の中で画いてきた構想が、史といえるものか、彼には自信はなかった。しかし、史といえなくても………という点については、自信があった。

これでは、ある意味では肩透かしである。唯この結論を書くためだけなら、B、Cは不必要である。Aに引き続いて「司馬遷の欲するものは、在来（しやうらい）の史には求めて得られなかった」と書くだけでよい。

しかしそれとは別の意味で、Dは筆者には非常に興味ある文章である。

「要するに司馬遷の欲するものは、在来（しやうらい）の史には求めて得られなかった」とある。普通ならば、それに続いて「司馬遷は自ら欲する史書の性格を沈思し、そこで確立された方針に従い、孜孜として著述に励んだ」と書く筈である。にも拘らず、「どういう点で在来（しやうらい）の史書があきたらぬかは、彼自身でも自ら欲する所を書き上げて見て始めて判然とする底（てい）のもの」である、と書かれている。これは一種の「矛盾」である。しかし、この様に一見矛盾めいた書き方をしたところに敦の真面目（しんめいもく）がある。

問は答を要求し、答を得て完結するが、実は答を得て始めて「問」がどの様な問であったかが分かるのである。一見不思議なようだが心の働きはその様になっている。「生きて動いている」人間の心の働きは、問↓答という

ような整然としたものではない。もっと混沌としたものである。整然となるのは答を得た後それを振り返って再構成したときである。だから「考える」場合は、答を求めるのではなく、問を求める。自分は何を考えているのかをひたすら考える。問が明らかになったとき同時に答えも明らかになる。

尚、この問題は筆者には面白いが、本稿との関連はそれほどないので此処で打ち切る。

それでは「史記」はどの様に書かれたか。

E 彼の仕事は実に気持よく進んだ。……………初めの五帝本紀から夏殷周秦本紀あたり迄は……………記述の正確厳密を期する一人の技師に過ぎなかったのだが、始皇帝を経て、項羽本紀に入る頃から、この技術家の冷静さが怪しくなってきた。ともすれば、項羽が彼に、或いは彼が項羽にのり移りかねないのである。

……………時利アラズ雕逝カズ、……………虞や虞や若ヲ奈何ニセン……………

これでいいのか？と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされた様な書きっぷりでいいものだろうか？彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は述べただけであった。しかし何と生気澁刺たる述べ方であったか？異常な想像的視覚を有ったものでなければ到底不可能な記述であった。彼は、時に「作ル」ことを恐れるの余り、既に書いた部分を読み返して見て、それあるが為に史上の人物が現実の人物の如く躍動すると思われる字句を削る。すると確かにその人物はハッラツたる呼吸を止める。之で、「作ル」ことになる心配はない訳である。しかし、（と司馬遷が思うに）之では項羽が項羽でなくなるの



ではないか。項羽も始皇帝も楚の莊王もみんな同じ人間になって了う。違った人間を同じ人間として記述することが、何が「述べる」だ？「述べる」とは、違った人間は違った人間として述べることではないか。そう考えてくると、やはり彼は削った字句を再び生かさない訳には行かない。元通りに直して、さて一読して見て、彼はやっと落ちつく。いや、彼ばかりではない。そこにかかれた史上の人物が、項羽や樊噲はんかいや范增はんぞうが、みんな漸く安心してそれぞれの場所に落ちつくように思われる。

……数年の間、司馬遷は充実した・幸福とっていい日々を送った。……そうした数年の後、突然、此の禍（宮刑）が降ったのである

F

司馬遷は其の後も孜々ししとして書続けた。

この世に生きることをやめた彼は書中の人物としてのみ生きていた。現実の生活では再び開かれることなくった彼の口が、魯仲連の舌端を借りて始めて烈々と火を噴くのである。或いは伍子胥となって己が眼を抉らしめ、或いは藺相如となって秦王を叱し、或いは太子丹となって泣いて荊軻を送った。楚の屈原の憂憤を叙して、その正に汨羅べきらに身を投ぜんとして作る所の懷沙之賦を長々と引用した時、司馬遷にはその賦がどうしても己自身の作品の如き気がして仕方が無かった。

稿を起こしてから十四年、腐刑の禍に遭ってから八年……父子相伝のこの著述が大体最初の構想通りの通史が一通り出来上った。……又数年が過ぎた。史記百三十卷、五十二万六千五百字が完成したのは、

既に武帝の崩御に近い頃であった。

列伝第七十太子公自序の最後の筆を擱いた時、司馬遷は几に凭ったまま惘然とした。深いため息が腹の底から出た。目は庭前の槐樹の茂みに向かって暫くはいたが、実は何ものをも見ていなかった。うつろな耳で、それでも彼は……。歎びがある筈なのに気の抜けた漠然とした寂しさ、不安の方が先に来た。

上記のFの史記完成後の司馬遷の一句は、単なる数字の羅列のように見えるが、宿願を成し遂げた司馬遷の肺腑の言として、朗々として唱すべき名文である。と同時にこれが、「太子公自序」そのものの最後の一句（文字通りの位置ではないが）である事もまた事実である。

以下にE、Fでの注目すべき幾つかの点に触れる。

最も問題となる「述而不作」に就いては、Eに

「……述べるとは、違った人間は違った人間として述べることではないか……彼はやっと落ち着く。いや彼ばかりではない。そこにかかれた史上の人物が、項羽や樊噲や范增が、みんな漸く安心してそれぞれの場所に落ちつくように思われる。」

と云う一句がある。司馬遷はこの様に書こうと決心したのだろう。しかし「ように思われる」と云う点に、主観性が潜み、「作る」が入る可能性が残る。これに対して司馬遷＝敦は、同じくEで

「事実、彼は述べただけであった。しかし何と生気澆刺たる述べ方であったか？異常な想像的視覚を有ったものでなければ到底不可能な記述であった。」

と云う、極めて微妙な「弁明」をしている。「彼は述べただけであった」と云いながら「想像的視覚」と云う言葉を用いている。「想像」とは、当然ながら、眼前にないものを心の中で作り出すことである。これは「創る」にならぬのか。これに関しては、司馬遷＝敦は、Eでは黙して語らない。

尚、上記の「しかし何と生気澆刺たる述べ方であったか云々」も、考えてみれば奇妙な文である。

この述懐の前後は、司馬遷を主語とし、行動や感情の表明を述語とし、畳み掛けるように文意が高まっ行く。そこに突然、敦の、同様に情動的なこの文章が挟まっている。

後に触れる宮崎市定博士の言い方を藉りれば、講釈師が張り扇を叩いて佳境に入ったとき、感激した黒子くろこが、突然舞台に飛び出した様な感は免れない。それに就いては、「観客」それぞれの観方があるだろう。

しかし筆者が興味を持つのは、これらがその俚、史上実在の人物を主題として作品を作る場合の、敦の心の動きを示している点にある。上記の司馬遷＝敦の文言をその俚借用すれば

「いや、私（敦）ばかりではない。そこに書かれた史上の人物が、李徴やステイブンスンや叔孫豹や牛や紀昌や甘蠅師や蒯瞶や子路や李陵や蘇武が、みんな漸く安心してそれぞれの場所に落ちつくように思われる」となる。

いわゆる歴史小説を書く場合、多くの作者は「述べるのか、作るのか」について、ある程度自己の態度の決定

を迫られる。高名な、鷗外の「歴史其尽と歴史離れ」もその例の一つである。敦も、意識的か無意識的か半意識的かは別として、それを、司馬遷に託して述べたとも考えられる。

司馬遷Ⅱ敦は、Dで「どういう点で在来の史書があきたらぬかは、彼自身でも自ら欲する所を書き上げて見て始めていて判然とする底<sup>てい</sup>のもの」である、と述べている。Fでは正に史記は完成した。論理的整合性に従えば、ではここで、「その答」を求めることになる。ところが、実際にFに示されているのは、完成者の姿を示す凄惨な迄に美しい描写だけである。筆者もそれには賛辞を送って置いた。

だが、この様な場合、論理的整合性を求めるのは間違いであろうか。「……彼の口が、魯仲連の舌端を借りて云々」がその答である、と一応は云える。しかしそれは読む側からの好意的解釈で、書いている側はもっと切迫した情感の吐露になっている。その様な配慮の下の文面とは思われない。

叙情的表現こそこの場にふさわしいのであって、例え論理的には尤もなことも、この場でその様な質問をするのは、場違いである、と云うのであろうか。先にも触れたがDとFでは司馬遷の状況は激変している。しかしその様な司馬遷もやはり「……自ら新しいものを創るという形でしか現れない」と云う志しは堅持したはずである。折角Dで、「書き上げて見て始めて判然とする底<sup>てい</sup>のもの」と述べていた。元気だった頃のDでの決意をFの様な状況下に改めて尋ねるのは司馬遷に対して非礼に当たるが、敦は一言それに触れるべきではなかったか。

次に、E、Fで、戦国時代後期から人物が急にハッラツと動きだした様に述べてあるが、何故その時期からそ

うなったのか、更に、人物がハツラツと動きだしたと云うが、事実その様に書かれているのかと云う疑問もある。前者に対しては敦は何も触れていない。後者の判定は筆者の任ではない。その様な批判は、敦にとっては自分の記述全体の基盤を揺るがすことになるから、当然触れるはずがない。

### 宮崎博士の所説と敦の所見

処が、意外にも、宮崎市定博士がそれらの課題に明解な解答を与えている。

「意外」と云うのは、当然ながら、敦の「李陵」とは全く無関係に行われた宮崎博士の史記の本文解読の努力と、その「史料」の考察が、結果において、上記の諸々の疑義を見事に解明しているからである。

「此処からは、客観的叙述の慣習により、宮崎と呼称する。」

つぎにその議論の要約を、主として宮崎の「自跋集」の「五・史記」に準拠して示し、続いて敦の描く司馬遷の歴史記述との関連を考察する。

以下、この項に関しては「……………」は宮崎の文である。

先ず、『史記』の行文の妙はその人物の行動に就いての迫真の描写にあると言われる。」と述べるが、この価値自体は逐次考察を進めるに連れて怪しくなる。

繼いで宮崎は古典解読の一般的知的考察として

「本文読解の努力と平行して必然的に生ずるのは、『史記』が如何なる史料を利用したかの問題である」とし、上記『史記』の行文の妙」の源泉探索の意味も込めて、

『史記』にはその様な書かれた史料の外に、書かれざる史料、口承伝説の類が多く利用されたことが、古来指摘されている。……このような口承伝説とは抑如何なる性質のものであろうか。」

と考察を進め、これに関しては

「この問題に対し解決の緒を与えてくれたのは、実は『水滸伝』の文章であつた。」とし、その所以を示す。

宮崎の論述は明解であるが、筆者が始めてこれを読んだときは、当然ながら書き下し文であり、両者の対応がともすればかすみがちになったので、ノート代わりに自家用の対照表を創ってみたが意外に有効だった。以下にそれを表示する。

#### 水滸伝 の場合

#### 史記 の場合

ア、『水滸伝』の叙述は希代の名文とされている

ア、『史記』の行文の妙は。その人物の行動に就いて

が、よく読んでみると、名文が名文とされるのは、人物の行動の描写にある」

イ 「この描写の手法は『水滸伝』の著者の創作……でなく、以前にどこかで実演された演技をそのまま借りてきて転載した結果だということが、従来から指摘されている」

水滸伝形成の経路

ウ 「宋代以来主として江南において都市文化が栄え」

エ 「そこには瓦市と称する庶民娯楽場が設けられ」

オ 「各種の芸人、講師、奇術師などが座を設けて、それぞれ得意の技を披露した」

カ 「特に語りものは、長い間に多数の顧客の嗜好に合せ……洗練され、改良された結果、極

の迫真の描写にあると言われる」

イ\* 「『史記』の場合も同じ様な経路を辿ったに違いない」

ウ\* 「中国古代には近世と甚だ似通った都市文明の発達が見られた」

エ\* 「そこには市と称する庶民のリクリエーションの場があり」

オ\* 「各種の見せ物演じ物が行われ市民の心を楽しませた」

カ\*

限まで高度に発達した芸術品になったのである  
それが先ず小冊子に編集されて、或いは芸人の  
種本となり、或いは好事家の蒐集の対象となっ  
て、広く世上に流布した」

キ 『水滸伝』はその様な世俗的な文芸の中か  
ら、最も人口に膾炙した小話の優秀なものを選  
んで一編の長編小説に仕立てたものに外ならな  
い」

キ\* 「司馬遷は実に真面目に講談師の口演を一句残さず  
写し取ったのである。それが結果として『史記』の  
叙述は真に迫った描写だとして、名文の誉れを高か  
らしむる結果に繋がったのである。」

この様に見てくると、『史記』に就いてのキは極めて自然な結論のように見受けられる。  
唯、『水滸伝』の場合は、その結論に到るウゝカはそれぞれ実証的根拠がある（様に書れている）が、『史記』  
ではそれに応ずるウゝカは一部は欠で、他は推定であり、いわゆる状況証拠である。

『水滸伝』で、キの根拠を示している力は、〈編集されてた小冊子が流布されていた〉となっているが、その  
様な小冊子の現在での存否、または過去での存在の証拠、に就いては宮崎は言及していない。しかしそれはイの  
「従来から指摘されている」と言う記述から保証されていると見てよい。何故なら〈当時〉何らかの証拠があっ  
て始めてその様な〈指摘〉がなされた、と考えられるからである。



一方、『史記』では、ア、ウ、エ、オの様な状況証拠はあるが、キの根拠になるカ<sup>\*</sup>の欄が空白になっている。これはある意味では仕方のない事で、宮崎によれば、それらは「書かれざる史料、口承伝説の類」で、証拠として残っておらず、またそれを保証する筈のイもまた空欄になっているからである。（敦は文字禍で老博士ナブ・ア・エリバをして「書かれなかったことは、なかったことじゃ。……歴史とはな、この粘土板のことじゃ」と云はしめている。宮崎がこれを聞いたら何と云うであろうか。）

さて、宮崎は『史記』の表現そのものの分析から、『史記』に就いて、カ、イを補うに足る〈証拠〉を示す。日本の俗諺の、講釈師見てきたような嘘を云い、からも分かるように、「講談師の口演を一句残さず写し取った」場合は、講釈または演技特有の嘘が入る。嘘と言っても意識的に聴衆を欺くと云うよりは、講釈または演技特有の間など、忠実な写実ではかえって嘘に見えるために入れる〈嘘〉である。

宮崎は史記で名文の誉れ高い刺客列伝第二十六の荊軻<sup>（イ）</sup>の項や、敦も言及している項羽本紀の中の、鴻門<sup>（ウ）</sup>の会の記述に、この種の〈嘘〉を指摘する。この指摘は非常に説得力がある。『史記』の源泉に就いて、宮崎がカ（実は空欄）で示したことになる判定は、『水滸伝』の場合とは一部異なる証拠に基づくが、実証的に証明されたと見てよい。

〈何と生気滲刺たる述べ方であったか？ 異常な想像的視覚を有ったものでなければ到底不可能な記述であった。〉と敦が嘆じた個所、それは同時に〈述而不作〉に就いて敦がその判定を暈した形で述べていた個所でもあるが、宮崎によれば、それは「講談師の口演を一句残さず写し取った」個所である。これにより、〈述而不作〉

の問題は、Eの記述に関しては、司馬遷は「講談師の口演」を史料として用いていた、と云う形で、確かに〈述而不作〉であったと判定が下りたことになる。司馬遷のこの様な意味での〈述而不作〉の方針は、場面々により変容はあっても、多分、史記全体に亘って堅持されたものと思われる。

また対照表には対応する個所がなかったので載せなかったが、宮崎は

「その演じ物の主題は、市民にとってある程度の予備知識のある歴史上の事件、人物が……有利である。……漢の武帝の時代ならば戦国末期から秦始皇帝時代……或いは漢初の功臣の事蹟などが手頃である」とも語っている。

これなどは、何故急に「項羽本紀に入る頃から（勿論列伝にある魯仲連、伍子胥、藺相如、太子丹、屈原等々も含めて）生氣澆刺たる述べ方」になったかと云うE、Fでの問への、明確な解答になっている。

註（イ） 宮崎市定・自跋集 八五頁〜八七頁

註（ウ） 宮崎市定・自跋集 八七頁〜八八頁

## 結語

李陵の司馬遷に見られる、敦の歴史に対する態度は、既に見てきたように、正統的である。

司馬遷は、単に材料の蒐集しゅうしゅうのみで終わった父の志しを継ぎ、父の蒐集した資料と官廷所蔵の秘冊とを用い、さ

らに口承伝説の類まで利用して史記の編纂に着手している。司馬遷には歴史記述に就いての方法論的考察は認められ、個人の活動に対する嗜好は認められるが、歴史は既定の概念として受けとめられ、その原理的考察は少なくともA～Fには認められない。方法論的考察も概して常識的のように思われる。敦はその様な司馬遷の態度を史家として当然として受けとめている。その意味では「歴史一般」に対する敦の態度は寧ろ平凡とも言える。筆者は、敦は歴史に就いては、彼の基本的情念である「<sup>(エ)</sup>感覚と観念の認識論的対比、激しい自我意識、強い求知心、死、自虐、尊大な自尊心、存在の不確かさ、分解癖、宇宙における人間の地位、それに関連して生ずる様々な想念、等々」ほどには、深い関心がなかったのではないかとさえ思える。

註(エ) かめれおん日記や狼疾記に見られる敦の思考の基本的傾向と認められる条項、次の「文字禍」のはじめの項のGを参照

## 文字禍

次に、文字禍での「歴史」の取扱いに就いて考えるて見る。

それにはやはり文字禍の分析から始めなければならない。一見自明に見える前半の「説明」も、後半への布石の意味も持っているので、その点は寛恕されたい。

文字禍の原動力としての、敦の持つ二つの基本的思考傾向

筆者は前稿<sup>(オ)</sup>「はるかな国」とおい昔・中島敦の魂」で

G かめれおん日記と狼疾記……には敦の生の声が無造作に配置されている。感覚と観念の認識論的対比、激しい自我意識、強い求知心、死、自虐、尊大な自尊心、存在の不確かさ、分解癖、宇宙における人間の地位、それに関連して生ずる様々な想念、等々。

これらはそれぞれ単独に、あるいは連合されて後の敦の作品のテーマになっている。彼の作品のある部分は、此処で醸し出された思想を核として形成されたように思われる。

と述べて置いた。

その考えは基本的には今も変わらない。

「文字禍」は、上記の敦の生の声（思考の基本的傾向）のうち、分解癖（存在の不確かさ）と、感覚と観念の認識論的対比、の変形である行動と観念の対比、が核になって形成された作品である、と筆者は考える。

註（オ）「はるかな国」とおい昔・中島敦の魂」・北海道武蔵女子短期大学紀要・第二十八号・平成八年。なおこの稿は、「中島敦の会」主催で平成七年十二月三日、県立神奈川近代文学館で行われた公開講座での筆者の講演を整理補充したものである。

分解癖とは、文字の凝視のうちに、それが単なる無意味な図形に見え始め、それにつれて周囲の全てが、人間生活も含めて無意味に見えてくる症状で、既に「北方行」や「狼疾」で、敦の愛読者にはお馴染みの症状である。

行動と観念の対比は、これまた筆者は旧稿「中島敦・覚え書き——行為と思索」で

中島敦の作品（思考）の特徴の一つに、行為（肉体）への憧憬・傾斜がある。……それは作品にどのよう  
に現れているか等々を 原始的情動としての側面 宿痾に基因する側面 行為による思索の止揚 の三  
点に即して考察する

との書き出しで、「考察」した。

「悟浄歎異」には、観念過多に対する生（肉体的）の、思考と合体した行動への憧憬が、数多く見られるが、  
後への引用を念頭に置いて、次のような活写を提示する。

H 俺は、悟空の文盲なことを知っている。……無学なことを良く知っている。しかし、俺は、悟空の（力  
と調和された）智慧と判断の高さを何ものにも優<sup>ま</sup>して高く買う。……彼は、大抵の動物なら一見して其  
の性質、強さの程度、その主要な武器の特徴などを見抜いて了う。雑草に就いても、どれが薬草で、どれが  
毒草かを、実に良く心得ている。その癖、其の動物や植物の名称（世間一般に通用している名前）は全然知  
らないのだ。彼は又、星によって方角や時刻や季節を知るのを得意としているが、角宿<sup>かくしゆく</sup>という名も心宿<sup>しんしゆく</sup>とい

う名も知りはない。二十八宿の名を悉くそらんじていながら実物ほんものを見分けることの出来ぬ俺と比べて、何という相異さだろう！目に一丁字の無い此さの猴さるの前にいる時程、文字ふによる教養きようの哀れあはれさを感じさせられることはない。(圈点筆者)

註(カ)「中島敦・覚え書き行為と思索」・北海道武蔵女子短期大学紀要・第二十号・昭六十三年。

## 生の声・思考の基本的傾向と作品 I

さて、この分解癖は、信条の告白とはなり得ても、単独では作品のテーマにはなり難い様に感じられる。事実これは何れも「作品」の中の一齣として述べられている。

これに対し、観念過多 対 行動への憧憬、は、単独で作品のテーマになり得る。

先に言及した「悟浄歎異」は、ある意味ではその様な作品と見ることもできる。彼の習作「プールのそばで」も、色々なエピソードをちりばめているが、基本的には同一の範疇に属する。

プールでは、三人の中学生が並んで泳いでいた。……………彼等は全く良い体格をしていた。その真黒な身体を、素直に伸びた足を、筋肉の盛上った肩つきを、三造は此の上なく羨ましいものに思った。……………丁度何年か前、上級生に打ぶたれた時に感じた、あの「肉体への屈服」と、「精神への蔑視」とを、彼は再

び事新しく感じるのであった。

が、その結語（敦にしては珍しく爽やかな文だが）になっているのがその証拠である。

処で、分解癖と、行動と観念の対比、はそれぞれ別個の観念である。

分解癖と無関係に、行動と観念の対比に想いを致すことは出来るし、行動と観念の対比と無関係に、分解癖に陥ることがあり得る。

文字禍は此の相互に独立な観念が見事にドッキングした作品である。

## 生の声・思考の基本的傾向と作品Ⅱ 敦の独創性

筆者は、生の声を作品化する敦の作家的着想の卓抜さに常に感嘆の念を感じざるを得ない。

Gで指摘したような基本的情念・観念は、誰でもが感ずるとは限らないだろうが、その様な感じを持つ人はまた、必ずしも少なくはないと思われる（例えば敦の熱烈な愛読者！）。しかし、それらの観念は、筆者が今まで繰り返し言及してきたように、信条の告白にはなるが作品にはなり難い。処が敦は「いとも簡単に？」それを「具体化」する。

「無限の時間と空間との間の一瞬の閃光」に対する愛惜、に対しては、「ホメロスと呼ばれた盲人のマエオニデエスが、あの美しい歌どもを唱い出すよりずっと以前に、喰われて了った一人の詩人」シャクを、「合わせ鏡

のように、目くるめくばかり続く無限」に対しては、「俺は、もと、此の木乃伊だったんだよ。たしかに」と転生を「自覚」したパリスカスを、行動と観念の対比に対しては、孫悟空を、それぞれ想定して、作品に仕上げている。

尤も、「この様な観念」は生の材料では生々し過ぎるのか、「プールのそばで」などは例外とし、何れも「架空」の物語、「お譚」<sup>はなし</sup>になっている。

文字禍もその例に洩れない。分解癖と、行動と観念の対比と云う、相互に独立な観念を、文字の精霊と云う着想により結んでいる、と同時にこの話もまた譚<sup>はなし</sup>となる性格を付せられたことになる。

尚、後に言及する必要が起るので、周知であろうが譚<sup>はなし</sup>に就いて此处に一言する。

譚<sup>はなし</sup>は、当然ながら、虚構の世界の中に現実の世界より真実らしい世界を築き、逆にそれによって普段見落しがちな現実の世界の真実を提示してみせる、と云う働きを持つ。この様に云はば矛盾した条件を持っている。このバランスがよくとれていることが必要で、それを失すると文字通りの荒唐無稽の話となる。

### 文字の精霊の導入

「文字禍」の構成は文字の精霊の導入から始まる。

さて、既に見てきた文字の分解癖の実態から

一つの文字を長く見詰めている中に、何時しかその文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯と



しか見えなくなってくる。単なる線の集まりが、何故、そういう音とそういう意味とを有<sup>も</sup>つことが出来るのか……単なるバラバラの線に、一定の音と一定の意味と有<sup>も</sup>たせるものは、何か？ここ迄思い到った時、老博士は躊躇<sup>ためらい</sup>なく、文字の霊の存在を認めた

としての文字の精霊の導入はそれほど抵抗なく（読者に）受け入れられる。

文字に宿る精霊と云うからには何となく小さい感じを持つだろう。小さい精霊↓悪戯↓わるさ、と云う連想も割合自然に浮かんでくる。

### 行為と観念の相克

つぎに「文字禍」では、老博士ナブ・アへ・エリバを狂言廻しとし、精霊↓悪戯↓わるさ、の系列より文字（文化）の消極面から記述を始める。

文字の精霊のなす悪さⅡ文字への過信の起こす害Ⅱ観念過多Ⅱ基本的生命力の減退、これは敦にとっても、「我々」にとっても既にお馴染みのパターンである。文字の害に犯された人々を描写することは、敦にとっては自分の庭を歩くような容易さであろう。

方針としては、例えば、先に提示した「悟浄歎異」の一節Hの記述を「逆に」書き替えるだけでも良い。こうなると、「司馬遷」のEも援用したくなる。

「敦は疑う。こんな熱に浮かされた様な書きっぷりでいいものだろうか？」

以下反語的に

「しかし何と生気澆刺たる述べ方であったか？……さて一読して見て、彼はやっと落ちつく。いや、彼ばかりではない。そこに書かれた文字の害に犯された人々が、みんな漸く安心して？それぞれの場所に落ちつくように思われる。」

これほど、これらは、敦にとっても、「我々」にとっても既知の範囲である。

また、本来は肉体と思考の合体した行動への憧憬の阻害が、文字の精霊のなす悪戯として如何にも納得できるように書かれているが、これは文字の精霊の導入が成功したことを示している。

## 二つの基本的思考傾向のみを基盤とする 仮想・文字禍

「文字禍」の作品としての此処までの進展において、その基盤をなす基本的思考傾向は、既に屢々触れてきたように、分解癖と行動と観念の対比の二つである。また譚の枠組みも、文字の精霊が素直に納得される状況であれば、舞台は何処でもよく、文字もまたどんな文字でもよい。

さて、これに、途中の歴史談義等を飛ばし、ナブ・アヘ・エリバの大王への「報告書」の提出、大王の怒り、老博士の謹慎、文字の霊の己達への讒謗者ざんぼうしやに対する復讐、ナブ・アヘ・エリバの圧死による終結、と繋ぐと、こ

れで一遍の「仮想・文字禍」が出来上がる。これは稍内容が細くなるが、最後まで首尾一貫した整合性を持ち、その点では一種結晶のような美しさを持つ。これは発想の根柢が深く彼の内部に根ざしたものであるからである。

また「仮想・文字禍」の「細さ」も瑕瑾にはならない。狐憑、木乃伊、山月記なども、譚としての構成やそれに人を引き込む力は抜群だが、譚の核心の部分は意外と単純だからである。

### 楔形文字を主題とした理由

此処で、今まで触れなかった、敦が「文字」として楔形文字を選んだ理由を考えてみる。

文字の精霊の出現による「行為と観念の相克」については、既に「仮想・文字禍」でも示したように、舞台は何もアシュル・バニ・アパル大王の時代に限る必要はなく、文字もまた楔形文字に限る必要はない。

しかし、分解癖↓文字の精霊のメカニズムを精細に考えると、楔形文字が「必然的に」浮かび上がって来る。さて、楔形文字の登場には、前稿「はるかな国」とおい昔・中島敦の魂」の文字禍の項に

漢字はあまりに我々に慣れすぎていて、「分解癖よりの文字の仮象性の暴露」に用いるには無理がある。

……精霊もでてくるのだから架空性が欲しい。同様の理由により舞台は古代。精霊の住処として図書館も欲しい。あまり使いすぎたかも知れぬが、「丁度、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように、すっかり埋もれて消えて了う（山月記……但し文の順序は変えてある）」のも悪くない。幸いニネベの図書館

の再発掘の話しも聞いた。従って古代メソポタミヤ文化圏だ。では——と撰んだのかも知れない。と簡約化された形で述べておいたが、以下にそれを敷衍する。

「文字」というものは、敦の指摘を待つまでもなく「意味のない一つ一つの線の交錯」に契約上の意味を与えたものである。それを我々が実際に、意味のある文字として認識するには、多分頭の中で一種の「統覚作用」が行われているのだろう。

しかし文字を使用する際に、その様な規約性を一々意識していたのでは煩雑さに堪えられない。頭は自己防衛的にその様なことを意識しなくなっているのである。文字を無意味な図形の集積と意識するのは、その様に我々を無意識裡に濃厚に囲んでいる慣習を振り解くことか、或いは、半ば無意識に行われている「統覚作用」に破綻が生じたのか（簡単に云えば一時的に多少頭が「おかしく」なったのか）、それらの複合態かの何れかであろう。「分解癖を意識的に起こそう」とすると、余程強く意識を集中して「ことに当た」らなければならない。

敦の場合は、彼の記述から推定すると、分解癖は大抵意識しないで突然発生しているから、多分「統覚作用」の「故障」であろう、が、強い意識的思考がすぐそれに続き、文字の規約性の暴露と云う本格的反省を行っている。

「文字禍」は分解癖から始まるのだから、読者にそれを納得して貰わなければならない。しかもそれは自然発生的に起こるのを待つのではなく、読み始めたとき半ば意識的に追体験して貰わねばならない。

漢字は、「分解癖による文字の仮象性の暴露」の実例として採用するには色々な意味で不適當である。

先ず、何よりも漢字は我々は馴れすぎている。我々を無意識裡に濃厚に囲んでいる。この場合の分解癖の発症の難しさは既に述べたとおりである。

次に、漢字は、最も基本的な部分では敦の分解癖の批判の通りだが、目は目の、車は車の形をしており、漢字構成分析の古典である説文の六書、象形・指事・形声・会意・転注・仮借を待つまでもなく、必ずしも「意味のない一つ一つの線の交錯」ではない。

この様に考えると、文字禍は、少なくとも中国を舞台とする事は出来ない。

「文字禍」では、文字の精霊が登場してくるので、当然古代の文字となる。「その様な」条件を満足する「文字」としては楔形文字、エジプトのヒエログリフ、マヤ文字等々が考えられる。

「小説」は知と不知との境界に発生する。良く知っていることはわざわざ話を聞かなくても分かっているから読まない。全く知らないことは読んでも分からないから読まない。

マヤ文字はシンパシーが起こり難いので省かれたのだろう。

エジプトのヒエログリフも象形文字なので、漢字と同様の意味で此处に用いるには「難点」がある。

此処まで来れば、文字禍で楔形文字が登場することは明かになろう。楔形文字は、古代の文字で、且つ、大多

数の読者にとって（勿論筆者にとっても）、文字であって、しかも「意味のない一つ一つの線の交錯」に「見える」。始めから既に分解癖が発症している！

註（キ）この様に考えると、文字に関しては漢字もこの範疇に入るので、再びその「不適當」さが示されることになる。

註（ク）敦が「文字禍」で文字の分解癖として「意味のない一つ一つの線の交錯」と述べているのは、楔形文字を頭に置いているのかも知れない。周知の通り、元々は象形文字であった楔形文字も、それを記録する際の物理的条件により、見た目には「意味のない一つ一つの線の交錯」と映るようになった。多分漢字に就いて起こったと思われる狼疾記に在る文字の分解癖には「その文字を一部分一部分に分解しながら……」とあるが「意味のない一つ一つの線の交錯」と云う表現はない。

### 楔形文字文化圏の消長 と それに対する敦の考え

楔形文字は紀元前四千年紀シュメル人の使用から始まり、それらはバビロニア、アッシリアの世界に用いられ、隣接するエラム人や小アジアの諸地方に及び、ペルシャにも影響しており、「ギルガメシュ」の壮大な叙事詩を生み、アシュル・バニ・アパル大王の時代（前六六九～前六二六在位）にはニネベに二万五千枚の粘土版を蔵し、ビストウーンの地に前五世紀アケメネス朝ペルシャのヒュスタスペス、ダレイオス、クセルクセスの功業を刻んだ。

この様に楔形文字に刻まれた、三千年余の長大な歴史を持ち、中近東の広大な地域に亘った文化が、空しく砂に埋没し、或いは忘却の彼方へ没し、遙か二千余年の後、発掘解読され、今まで僅かにヘロドトス、旧約聖書などに垣間みられた「歴史」が、その膨大な姿を現し始めた。

「彼」は、「狐憑」で、はるかな昔、後の世の誰にも知られず一人の詩人が喰われて了ったことに、一掬の涙をそそいでいる。

この様な敦が、上記の事実に関心動かされぬ筈がない。

埋没し、後に発掘されたニネベの図書館を造り、「当時第一流の文化人」でありながら、同時にエジプトやアラビヤを再征服した、アシュル・バニ・アパル大王の時代を、敦はある種の感慨を持って「文字禍」の舞台に選んだのかも知れない。

何れにせよ、楔形文字から、アシュル・バニ・アパル大王の時代やその当時の「歴史家」や彼等の「歴史談義」を連想することは、かなり自然な心の働きである。

### 文字の積極面 歴史談義

此处で再び「文字禍」の展開に戻る。

今までは専ら文字の霊の否定的面を示してきた。ここから肯定面を述べてバランスをとりたいと思っても不思議ではない。

文字の害毒を知るもの（ナブ・アヘ・エリバ<sup>ハ</sup>敦）は同時に文字の威力（積極面）もまた当然知っている。文字の精霊の犠牲者として例示された、ある書物狂の老人の話は、韜晦的表現だが、一方では既に文字に対する「憧憬」、「賛辞」にもなっている。

では、どの様にして文字の霊の積極面を示すか。その例示は何も「歴史」に限るわけではない。例えば法律なども十分に候補になり得る。だが、多分、前段末尾に示したような考えより、主として歴史が選ばれた。

依然ナブ・アヘ・エリバ<sup>ハ</sup>敦を狂言廻しとして譚<sup>はなし</sup>は進展する。

さて、ナブ・アヘ・エリバ<sup>ハ</sup>敦が、文字の威力を示す例として示している「古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かったからじゃ」は、いくら譚<sup>はなし</sup>とは云え、虚構と現実のバランスが破れており、譚<sup>はなし</sup>とは意識しても、そうなるが無文字文化はどうなるのかと、空々しい感じを受ける。同様の趣旨でナブ・アヘ・エリバが提示している他の例も、その点では何れも大同小異である。文字の霊の積極面を示すことは意外に難しい。

さて、ナブ・アヘ・エリバ<sup>ハ</sup>敦は「歴史」を談じ始める。彼は、若い歴史家イシュデイ・ナブと同様にアシュル・バニ・アパル大王の同時代人である。と同時に敦はそれよりも二千五百年余後の人である。

「歴史とは、昔、在った事柄をいうのであろうか？それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？」



「歴史とは、昔在った事柄で、且つ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか」この辺りではナブ・アヘ・エリバは同時代人の普通の歴史家としてイシュデイ・ナブに対応している。

さらに

「書き洩らしは？」

と問われると

「書かれなかった事は、無かった事じゃ。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かったのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ」

と云う「問題の」発言をする。

筆者はこの発言に、ナブ・アヘ・エリバの中に、彼を押し退けて突然表に現れてきた敦の姿を見る。ナブ・アヘ・エリバは当然敦の分身であり、今までは、他の多くの作品の敦と分身との関係のように、破綻のない平衡を保っていたが、此処に来て突然その平衡が破れた。

ナブ・アヘ・エリバがアシュル・バニ・アパル大王の同時代として歴史を語り始めたとき、「敦」は忽然として楔形文字文化圏の消長を想起した。「南米の駱駝<sup>フアナコ</sup>は死や危険を予覚したときは、今はもはや意味を持たなくなつたにも拘らず、祖先の避難場所のあった場所を指してのがれようとする」(狼疾記)。いま別に敦に危機が迫っているわけではない。しかし強いショックに、帰巢本能のように、本来の情感・思考が動き出す。sub specie aeternitatis 長大な歴史、広大な地域、栄枯盛衰、空しき砂の中への埋没、忘却・再発見、歴史に対する感慨は

敦の平常心を失わせた。

彼は二千五百年余後の身であることを忘れ、ナブ・アへ・エリバの口を藉りて思わず叫び出す。

イシュデイ・ナブよ、君は何も知らないのだ。「我々」の粘土版に刻まれた楔形文字の歴史などは、芽の出ぬ種子よりも、もっと儚いのだ。今こそ栄華を誇っているがやがて空しく砂に埋没し、忘却の彼方へ没し、遙か二千年の後、発掘解読される運命にある。バビロン王の最後に就いての異説も、「書き洩らし」もそれに比べれば、言い争いの価値もない。それらは何れも殆ど無に近い。だから自分はその様に云うのだ、と。勿論二千五百年余前のイシュデイ・ナブは当然ながら何のことか分からない。だから「若い歴史家は情けなそうな顔をして、指さされた瓦を見」、「妙な顔をして帰って」行くことになる。

敦にはこの様な「行動」の前歴がある（作品としては後だが）。黒子<sup>くろこ</sup>が、突然舞台に飛び出す例は、既に司馬遷のEで見えてきた。このナブ・アへ・エリバの発言も色々の解釈の余地を残すだろうが、後に起こったと同様なことか此処に起こったと見るのはかなりの蓋然性があるだろう。人格には統一性がある。

前編の李陵の司馬遷の記述から見ても分かるとおり、本来敦は歴史に就いて正統派である。勿論「李陵」は「文字禍」の後に書かれているから、「文字禍」の時と「李陵」の時とは考えは変わり得るとの見解はあるだろうが、敦は「父祖伝来の（儒学の）旧家」（狼疾記）に育った。史記も半ばは子守歌の様なものとも言える。当然彼の歴史観は李陵の司馬遷の場合が基本と見て良い。そこには何も奇矯さはない。極めて常識的な見解のみがある。

ここで、司馬遷の史記において「その様な書かれた資料の外に、書かれざる史料、口承伝説の類が多く利用された」(宮崎・前掲書)ことを想起するのも一興であろう。勿論「書かれない」と云う言葉の意味が此処とでは若干の違いはあるが。

彼の一見奇矯に見える此処での「発言」は歴史一般の原理的考察からの結論ではなく、消えた歴史に対する挽歌である。敦の一般的印象に背くかもしれないが、この場合は知的な発言ではなく情緒的発言である。

しかも此処には文字の精霊など入り込む隙もない。これでは、彼の立てた筈の譚<sup>はなし</sup>としての「文字禍」の構想自体が既に壊れて了うのではないか、との危惧の念が生ずるが、それを顧慮する暇もないほど敦にとってはシリアスな課題になっていたのであろう。

しかし一方、敦は此処でお譚<sup>はなし</sup>の作者として、読者へのサービスとして「面白さ」も(あるいは「を」)考えたのかも知れない。

純然たる「面白さ」だけに注目する場合、此処で歴史Ⅱ粘土板と宣言することは効果がある。「文字禍」は「論文」ではなく単なる譚<sup>はなし</sup>である。そうであれば、誰もが考え着くような「書き洩らし」に就いての弁明をくだくと述べるよりも

「書かれなかったことは、なかったことじゃ。歴史とはこの粘土板のことじゃ」  
の様な、「奇矯」な言明の方が遥かに話は面白くなり、刺激的になるからである。

## 文字禍の結語の若干の齟齬

歴史談義が終わった後の「結語」の最初の部分の、文字の「分解」と、その関連事項は、繰り返し述べる必要はなかったのではないか。

文字の「分解」の結果の波及効果としての「人間生活の凡ての根底が疑わしいものに見える」と云う事項は、今まで現れて来なかった「新しい」、ある意味では深刻な内容を持っているが、やはり文字の霊の悪戯の一つとも見られる。のみならず、この事項は、ナブ・アヘ・エリバが「……研究を之以上続けては……命をとられて了うぞ」との恐怖を感じ「早々に研究報告を纏め上げ、之をアシュル・バニ・アパル大王に献じた」と云う点にのみ関連を持つ。ナブ・アヘ・エリバが「否定的な報告」を出すのは決まっている。「早々に……献ずる」ためには、なにもわざわざ「分解癖の波及効果」をこと改めて理由として挙げる必要はない。「大王の急な命令により」でもよい。

文面に現れた限り、大王に献ずるナブ・アヘ・エリバの「研究報告」には「歴史」に就いた事項は全く含まれていない。

彼の圧死によるこの作品全体の終結は、「文字の害」を認めた讒謗者に対する文字の霊の復讐である。ナブ・アヘ・エリバの「歴史談義」は、文字への賛辞の筈である。文字の賛美者が文字の霊に復讐される謂れはない。

従って「歴史談義」は、「仮想文字禍」が最後まで整合性を保っていたのに対して、この作品全体の終結とは無関係である。

### 再び歴史談義について

何故この様なことになったのか。それはやはり「文字禍」に歴史談義を組み込むこと自体に無理があったように思われる。大体この作品の題名は「文字禍」である。文字の精は本来いたずらものである。ここでの歴史談義は文字の精のプラス面の提示を目的としている。いたずらものに「善行」を求めるのは無理である。当然歴史談義は全体から浮き上がる。しかもっと基本的には「司馬遷の結語」でも触れたように、彼の基本的情念と関係があるだろう。「仮想文字禍」の細くはあるが、それが持つ一種結晶のような美しさがそれを示している。

### 文字、歴史、歴史記述

しかし、上記の議論とは独立に、文字、歴史、歴史記述に就いての考察は当然ながらあり得る。だがこの様な議論は余程自制しないと、意外に拡散し、收拾の着かないことになりかねない。

「仮に」、文字、歴史、歴史記述に就いて、それぞれ二十通りの相互に独立な見解が存在するとすると、それら全体の組み合わせは、相乗積の八千通り、約一万通りである。論者各人は、その内、己の立場のみ正しいとの

態度を取るだろう。残りの、これまた約一万通りの議論の正否はどう考えるのだろう。「公平」に考えれば、論者の議論も、その正否の確率は約一万分の一である。勿論これが単なる「お譚」<sup>はなし</sup>に過ぎないことは筆者は十分に承知している。

話は変わるが、我国では毎年一年間に約一万人の交通事故の死者がいる。人口比の確率は大体二万分の一である。しかし、多分誰も自分が今年一年間に交通事故で死ぬとは思っていないだろう。

文字、歴史、歴史記述は魅力的課題である。筆者も考えるところがないでもない。以上が「今回の課題」に対する筆者の、現時点での解答である。